

細かい言及はなく、日本が負けたという認識をまだ持ち得ていなかったのではないかと考えられます。一方で8月15日の古里でのお盆を思い出し、家族のことを憂いて、「妻子の夢を見る」という記述もあり、複雑な心のうちが見えてきます。

日記が記されているのは1945年9月13日までで、長尾さんは1947年の12月に宮崎に復員しました。米軍に投降した年月日がわかりませんが、まだ捕虜となっていない1945年9月から1947年12月まで2年余りあることから、日本兵の捕虜収容所だった屋嘉捕虜収容所に送られ尋問を受けた後、ハワイに移送されていた可能性もあります。

※大阪大学助教の秋山かおりさんの調査によって、沖縄戦で米軍の捕虜となりハワイの収容所に移送された総人数は4839人、このうち県出身者は最大4053人と推計されることが分かりました(沖縄タイムス2026.2.13)。



恩納村内の米軍基地

3回にわたって長尾綱義さんの日記を紹介してきました。このたび、長尾さんのご親族より、「夢も結ばず」を寄贈いただき、文化情報センターで閲覧できます。ぜひ館内でごらんください。最後に日記を翻刻されたご家族の長尾正典さんが冒頭に書かれた「はじめに」を紹介します。

「この本が二度とこの

ような戦争の惨禍をおこさないために(中略)二十余万の沖縄戦戦没者の筆舌につくし難い無言の記録として次の世代に伝えることに役立てば幸甚である」

長尾さんたち要塞建築第6中隊や第二護郷隊の日本軍部隊が命からがら移動し、村内外の住民が犠牲となり、あるいは戦火を逃れるために方々を避難した恩納岳および周辺の山々は現在米軍キャンプ・ハンセンとなり、実弾演習が繰り返されています。現在も沖縄戦当時の証言を裏付ける調査や、戦争遺跡などの確認ができない状態にあります。

戦争当時の恩納岳山中の戦場の様子がうかがえる証言が嘉手納町史に残されています。戦争直後、食糧探しにいくために喜瀬武原から恩納岳中腹のコースをたどりながら移動した方の証言です。この証言では「山の中腹には南北に延びた小幅の道があり、地面から10cmくらいの高さの位置に足がひっかかりやすいよう、電線が引っ張られていた」「この電線にはいくつもの空き缶がぶら下がり、これにひっかかると音がるように仕掛けられ、米軍がいつでも攻撃できるように準備をしていた」「穴だらけの鉄帽や遺骨が散乱し近くの小川の上流にも白骨が多く残っていた」といった戦場の生々しい様子が記されています。戦後すべての遺骨が回収できたかは不明で、現在も山野にそのまま残っている可能性もあります。また戦跡も残されているものと考えられます。

村史戦争編は2022年に発刊しましたが、今後も住民の証言、体験記はもとより、日本兵の手記、軍隊の記録など様々な資料を手がかりに恩納村の戦争を明らかにしていきたいと思っています。(瀬戸)

【参考文献】

- ・「夢も結ばず——旧日本兵の沖縄戦記より——」長尾正典編(1990年)
- ・「恩納村史第三巻 戦争編」恩納村史編さん委員会編(2022年)
- ・「嘉手納町史資料編6 戦時資料下」嘉手納町史編纂審議会編(2003年)